The others・butterfly～友情禁止条例～

岸本 政臣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｈｅ　ｏｔｈｅｒｓ・ｂｕｔｔｅｒｆｌｙ～友情禁止条例～

【Ｎコード】
Ｎ２４８６ＢＡ

【作者名】
岸本　政臣

【あらすじ】
私達が生きている世の中では、自分以外の他の誰かも生きている…

自分が泣いたり、笑ったり、悩んだり、苦しんだりしている時に、どこかで他の人も同じ思いをしている…

『Ｔｈｅ　ｏｔｈｅｒｓ』
自分以外の人間は、同じ境遇で、同じような場面に出会っている

時…

どんな自分とは違う人生を過ごしているのだろうか…

ロマンスロケット（前書き）

この物語は『Ｂｕｔｔｅｒｆｌｙ～友情禁止条例～』の別編であり、続編ではありません。

又、この物語はフィクションであり、登場する人物、経歴、背景等は一切関係ありません。

ロマンスロケット

あの頃、まだ建設中だった鉄塔は、来てみると高さ６３４メートルの東京スカイツリーになっていた…

毎日少しずつ高くなっている鉄塔を、私達は気にもせずに過ごしていたけれど、このスカイツリーと同じように、私達も少しずつ成長して、気が付いたらある所で時間が止まっていた。

まだ途中までしか建てられていなかったスカイツリーの時のまま、私の時間は止まっていたけれど、周りの時間はどんどん過ぎていた事を、この時、スカイツリーに感じさせられた…

「玲奈、そろそろ行こう」

高柳明音が、松井玲奈に呼びかける。

二人は、名古屋を拠点とするアイドルグループ『ＳＫＥ４８』のメンバーであり、同い年ではあるが、グループでは玲奈が少し先輩。

二人は、明音がまだＳＫＥ４８のメンバーに加わって間もない頃、玲奈と共に過ごした『東京・浅草』に訪れていた。

「スカイツリーってこんなに高くなったんだ…気づいたら、私達も成人式だもんね、時間が経つのは早いなぁ…」明音が話す。

「そうだね…みんな、元気にしてるかなぁ…」

「さっき圭太に電話したら、もう待ってるらしいから、早く行こう」

明音は玲奈の手を引きながら、橋の上を急ぎ足で歩いた…

２００９年、浅草の町が三社祭で賑わう頃、玲奈と明音はＳＫＥ４８のメディア露出が多くなって来た事が理由により、学業と仕事の両立の為に、東京のこの町に住む事になった。

特に、雑誌の取材なども多くなった玲奈は、東京の高校に通いながら仕事を行い、名古屋での公演の時に帰郷する方が効率的であった。

「いゃあ、玲奈さんは分かりますけど、入ったばかりの私まで東京で生活するなんて、なんだか秋元先生が期待してくれてるみたいで感激ですね」

東京に向かう新幹線の中で、明音は新天地での生活に期待を膨らませている。

「東京って言っても、住む所は結構下町だよ。あと…同い年なんだし、これから同じ高校に通うんだから敬語で話すのはやめてよ」

「だって、玲奈さん先輩じゃないですか」

「玲奈でいいよ、なんだか私が偉そうに思われる…」

礼儀正しい明音は、たとえ年下であろうが、メンバーの中で先輩であれば敬語で話していたが、これからの生活を考えると、その関

係が、玲奈には少し窮屈に感じていた。

「分かった、じゃあ今からは、ただの同級生ね」

切り替えの早い明音に、玲奈も少し驚く。

東京に着いた二人は、電車を乗り換え、これから暮らす事になる浅草へ向かった。

地下鉄のホームから地上へ出ると、明音はその風景に唖然とする。

「東京って、思ったより古風なる所なんだね…」

「だから言ったじゃん、住む所は結構下町だよって」

玲奈は手を挙げてタクシーを呼び止めると、運転手に二人が住むアパートの住所を告げた。

車道には多くの警備員が立ち、通行上がかかっている。

「玲奈、スゴい！お神輿がいっぱい出てるよ！」

「今日は三社祭なんですよ。お客さん、どちらから？」運転手が話す。

「名古屋からです」

「そうですか…夕方までやっているから、後で来てみるといいですよ。とても賑やかなんで」

運転手のニコニコと話す横顔が二人に見えると、新たな生活への緊張が少しとけた。

祭りの為、規制により通行止めが多く、少し遠回りはしたが、駅から比較的近い所に二人のアパートはあった。

３ＬＤＫの二人暮らしには十分すぎる広さの部屋に二人は入る。

「よかった、荷物も届いてるし、家具も揃ってる」嬉しそうに話す玲奈。

「ねえ、とりあえず整理は後にして、さっきのお祭りに行こう！折角だから、観光もしないと」

明音は持っていた荷物を部屋の隅に置くと、玲奈の手を引いて部屋を出た。

「ちょっと、観光って、どうせこれから住む所だよ」

アパートからしばらく歩くと、法被姿の人々が多く目につく。

「うわぁ～凄く賑やかな所なんだね」

ニコニコと笑いながら、楽しそうに話す明音。

二人が人の群にまざって神輿担ぎを見ていると、その群を掻き分けるように、一人の少年が暴れながら、警察に取り押さえられ連行されていた。

「だから！俺は関係ねえんだよ！」

少年の声は、神輿担ぎの威勢にかき消されるも、その姿は周囲の人間の注目となる。

「なんだか怖いね…」

しかめっ面で話す明音。玲奈もその姿に目を向けると、連れられている少年と、一瞬目が合った。

玲奈は驚いて、すぐに目をそらしたが、少年は睨むように玲奈を見ている。

「ちょっと玲奈、こっち見てるよ…怖いから他へ行こう」

玲奈と明音は逃げるようにその場所を立ち去った。

二人はしばらく祭りを楽しむと、途中で生活用品などの買い物に寄り道をして、アパートに帰宅した。

「楽しかった～でも、明日から学校行かないとだから、荷物出して整理しないと」

二人は荷物を分けると、自分がどの部屋を使うかなどと話しながら、ジャンケンをしている。

メンバーに加わったばかりの明音が東京に来る事になったのは、明音自身の成長の為もあるが、芸能人としての経験が浅い玲奈が、一人東京に来て仕事をする事は、彼女にとって、大きなプレッシャーになってしまうと考えられていたからでもあった。

しかし、根が明るい明音と二人で暮らす事で、互いの不安もなくなり、玲奈は今後の仕事にも期待が膨らんでいた。

二人は、明日から着て行く制服を、箱の中から取り出す。
「衣装やコスチュームもいいけど、やっぱりこれが一番いいよね」
制服を見つめながら、玲奈が嬉しそうに話す。
新品の制服を見ると、新しく始まる高校生活にも、一層に期待が高まった。
「明日から、学校楽しみだね」明音が話す。
「でも、今日の男の子、警察に捕まってたけど、何したんだろうね…怖いなぁ…玲奈も一人で歩く時は気を付けないと…そうだ！」
明音は何かを思い付いたように、紙とペンを手に取る。
「これからは二人で生活するんだから、二人の条例を三つ作ろう」
明音が始めに『玲奈・明音の禁止条例』と大きく書く。
「えっと…じゃあ、始めは」
・恋愛禁止
「何？こんなの二人じゃなくても分かってるよ」
「ダメ、玲奈はモテるし、可愛いし、おまけにスキだらけだから、二人の約束にもしておかないと」
「明音、なんだかマネージャーみたいだね…」

玲奈の顔がしかめっ面になる。

「それと次は…」

明音が次の条例を書き始める。

・外泊禁止

「何なのこれ？真面目に考えてないでしょ…」

「考えてるよ、これは玲奈よりも、私の条例かな…」

「じゃあ、三つ目は何なの？」

「えっと…三つ目は…」

明音のペンが止まる。

「思いつかないや、それは、今後考えよう」

明音は三つ目の条例を（　）にして記した。

「明日も早いし、早く整理して寝よう」

明音はダンボールを抱えて、自分の部屋に向かった。

「玲奈…」

「何？」

「学校、楽しいといいね」

明音は玲奈に『ニコッ』と笑顔を見せると、部屋の扉を閉めた。

翌日、玲奈と明音は転校先である『私立　桜道高等学校』を訪れた。

二人は同じクラスになり、担任の横山に連れられて『三年A組』の教室に向かう。

教室に入ると、それまでざわついていた様子が、一瞬で静かになった。

「今日から転入してきた、松井玲奈さんと、高柳明音さんです。皆も二人には、色々と教えてあげて下さい」

横山からの紹介を受けると、二人は用意されていた席に着く。

「よう！玲奈、久しぶりだな」

玲奈に話しかけたのは、中学校まで同級生であった立花圭太だった。

圭太とは、名古屋では家が近所であり、小、中学校と同じ学校であった。

親同士の仲も良く、二人の家族は、よく互いの家を行き来する仲であった。

しかし、圭太の家族は、父親の仕事の都合で東京に転勤することになり、圭太も中学を卒業すると、この桜道高校に入学した。

今回、玲奈が東京に住むこととなり、知人がいないと不安だと思う玲奈の親の計らいから、圭太の親に相談をして、この町に引っ越すことになったのである。

二年ぶりの再会であるが、玲奈はあまり、嬉しそうではない。

その訳は圭太のひょうきんな性格が、思春期をむかえた頃からか、玲奈には鬱陶しく感じていたからである。

玲奈は話しかける圭太に対して、久しぶりに会う人間への対応ではない、そっけない態度であった。

「アイドルになったんだって？あんまり見ないけど、テレビとか出てるのかよ」

「ちょっと、あんまり余計な事を、学校で話さないでよ」

やはり、圭太の態度は鬱陶しく感じる玲奈。

「まぁ、昔よりは女らしくなったかな」

圭太はヘラヘラと笑いながら前を向く。

「ねぇ、玲奈、知り合いなの？」

後ろの席に座る明音が問いかける。

「うん、まぁね…」

玲奈は面倒くさそうに、明音の質問を流した。

ＨＲが終わると、再び圭太が、玲奈と明音に話しかけてくる。
「明音ちゃんも、玲奈と同じアイドルに入ってるの？」
「うん、私は入ったばかりだけど」
圭太の話しに興味を示したクラスメイトたちが、玲奈と明音に寄ってくる。
「ＳＫＥかぁ…ＡＫＢなら知ってるんだけど…」
「明音ちゃんは、前の学校で何て呼ばれてたの？」
「ずっと『ちゅり』って呼ばれてたから、これからも『ちゅり』って呼んで！」
気さくな明音は、すぐにクラスメイトに打ち解けるが、玲奈はやはり、おしゃべりである圭太が鬱陶しい。
「玲奈は俺と幼なじみだったからさ、サインとか欲しかったら、俺を通せよ」
「ちょっと、圭太！いい加減にしてよ！」
圭太の態度に我慢できなくなった玲奈は、立ち上がると教室を出て行った。
「ちょっと！玲奈！」
明音は『ゴメンね』と言うように皆に手を合わせて謝ると、玲奈

の後を追いかけた。

「ちょっと玲奈！学校だからってあんな態度だと、すぐに悪い噂が広まっちゃうよ」

「分かってる！だけど、あいつは別！」

明音が知っている玲奈とは、まるで別人のように冷静な態度ではない。

圭太は昔から幼稚な性格であったが、玲奈とは家族絡みで付き合いが深かった事から、男子の前では、わざと玲奈をからかったり、中学生の頃にも一度、アイドルを目指そうとした玲奈の事を、馬鹿にして笑ったりと、彼女には、あまり良い印象がなかった。

二人は無事に初日の学校生活を終えて、自宅に帰ろうとする。

すると後ろから、圭太が追いかけるように走ってきた。

「玲奈、母ちゃんがおまえに会いたがってるからさ、家に寄ってけよ。ちゅりも一緒にさ」

圭太の誘いだが、彼の両親に対しては親戚のような気持ちであり、これから世話になる事もあると考えると、挨拶には行かなくてはと玲奈も考えていた。

「行くけど、わざわざあんたと一緒じゃなくていいわよ」

「久しぶりに会ってそんな言い方するなよ、ちゅりだって困ってるだろ」

『ニコッ』と笑う圭太に対して、明音も微笑み返す。

圭太は二人の手を引くと、強引に連れて行くように歩き始めた。

「ちょっと！何なの！放してよ！」

玲奈の言葉もかまいなく、圭太は二人を引っ張って歩いていると、不良っぽい容姿の少年二人が、圭太の前に立ちはだかった。

「へへへ…何ですか？」　圭太が脅えるようにように言葉を放つ。

「おまえ、この娘達、嫌がってるだろ、何やってるんだよ」

少年の一人が、圭太の胸ぐらを掴む。

その姿を見た玲奈は、慌てて圭太を殴ろうとする少年の手を止めた。

「違うんです！別に私達も本気で嫌がっていたとかじゃなくて」

「こんな男、どうでもいいから、君達は俺らと一緒に遊びに行こう」

少年が圭太を道の脇に放り投げると、今度は玲奈と明音を連れて行こうと、二人の手を掴んだ。

「ちょっと！やめて下さい！」

抵抗する二人に、少年は手を放そうとはしない。

圭太も止めようと向かっていくが、少年二人とは体格の差もあり、すぐに振り払われてしまった。

少年達が玲奈と明音にしつこく迫っていると、その後ろから、も

う一人の少年が来て彼等の肩を叩く。

「なんか、君達にも嫌がっているように見えるけど？」

「あっ！」

その一人の少年の姿を見て、明音はおもわず声が出た。

昨日、祭りの人混みの中で、警察に取り押さえられていた少年だ。

「なんだオマエ！」

少年達は彼に殴りかかるが、彼の方が喧嘩慣れしている様子であり、向かってくる少年達の攻撃を軽やかに避けてかわす。

あっという間に、二人の少年は押さえつけられて、彼に暴行を受けていると、先程まで座り込んでいた圭太が止めに入った。

「コウちゃん…もういいよ…」

「オゥ…おまえ…久しぶりだな…」

彼が手を放すと、少年達は逃げるようにその場を去った。

玲奈が彼の事をじっと見ている。

その視線に気が付いた彼も、昨日の事を思い出したように目を逸らすと、黙ってその場を去って行った。

「コウちゃん、ありがとう！」

圭太の声に彼は振り向かずに、かるく手を挙げて歩いてゆく。

「ねぇ、今の彼、知り合いなの？」

「あぁ、木崎浩一。元々は同じクラスだったんだけど、クラス一番の不良でもあったんだけど、家がゴタゴタしはじめたとかで、結局、三年になってすぐに学校を辞めちゃったんだよ」

「やっぱり、スゴい不良だったんだ…」

圭太の話しを聞いて、怖がる明音。

「そういえば、ちょうど玲奈が座っている席が、あいつの席だったんだけどさ、俺、元々仲良かったわけでもないし、寧ろ後ろから睨み付けられているみたいで怖かったよ…」

「アンタはちょっと女々し過ぎじゃないの？」

玲奈は圭太の頭を、カバンで『ポン！』と叩くと、一人前を歩き始めた。

圭太の家に着くと、母親の美奈子がニコニコしながら玄関に歩いてくる。

「玲奈ちゃん！久しぶりね。やだ！すっかり美人になっちゃって！」

「小母さん、お久しぶりです。あ、彼女、私と一緒に住む事になった、高柳明音ちゃんです」

「あら、こちらも可愛い娘。初めまして」

「どうも…初めまして」

一人っ子の圭太に対して、女の子が欲しかった美奈子は、小さな時から玲奈の事を、自分の娘のように可愛がっていた。

「二人とも、困った事があったら、いつでも家にいらっしゃい。ご飯とかも家に食べに来ればいいんだから」

「ありがとうございます…」

「早速だけど、ケーキがあるから、二人とも上がりなさい」

二人は釣られるように、圭太の家に上がり、リビングへ向かった。

美奈子は絶えずにニコニコと笑いながら、二人の前にケーキを差し出す。

「玲奈ちゃんは、中学生の時は剣道ばかりやっていたから、もっと女の子らしくすればいいのにと思ってたら、急に演劇部に入ったりして、今度はアイドルでしょ…本当に女の子って不思議よねぇ…」

「小母さん、あんまり、ちゅりの前で昔話はちょっと…」

美奈子の話しを聞いて、明音はクスクスと笑う。

「剣道やってたんだ、初耳」

「段位ではないけどね。胴着と袴を着てみたかったし、中学校の時に試合を見学したら、女の先輩が男の先輩と互角に戦うのを見て、私も強くなりたいとなぁと思って、剣道部に入部したんだ」

玲奈まで美奈子につられて、自分の昔話を始める。

そんな話しをしているうちに、外はすっかり暗くなってしまって

いた。
圭太の自宅で夕食までご馳走になった二人は、アパートまでの家路を歩く。
浅草公演六区の近くを歩いていると、急に、軽快な音楽が流れる音がが聞こえた。
流れる音につられて視線を向けると、音楽に合わせてダンスを踊る少年の姿が見える。
「あっ！あの人、木崎浩一君だよ」
おもわず声を出す明音。その二人の視線に気が付いた浩一は、音楽を止めた。
目が合った玲奈は、浩一に駆け寄っていく。
「ちょっと！玲奈！」
寄ってきた玲奈を、浩一は不思議そうに見ている。
「あっ…私、昼間に助けてもらった…松井玲奈って言うんですけど、昼間はありがとうございました。」
ガチガチに緊張しながら話す玲奈の姿を見て、浩一はクスッと笑った。
「あぁ…あの時のね。気にしないで、君らが一緒に連れていた男の事、ちょっと知ってたからってだけだから」

玲奈の思っていたイメージよりも、優しそうに話す浩一。

二人とも、昨日すでに出会っている事に気が付いてはいたが、互いに口には出さなかった。

「ダンス、上手いんですね。私もやってるから、今見ていて、スゴいなぁ～って思いました」

「ダンスはガキの頃からやってるからね。そりゃあ、少しはマシにもなるよ」

楽しげに話す二人の姿を、明音は浩一への恐怖心から、遠目で見ている。

「いつもここで踊っているんですか？今度、私にも教えて下さい」

浩一は玲奈の言葉に頷くと、玲奈はその場を後にした。

その帰り道、明音は不機嫌そうな顔をしている。

「玲奈、あんな奴と絶対に関わったらダメだよ」

昨日の浩一の姿を見たにもかかわらず、何の恐怖心も抱かずに接していた玲奈を見て、そんな彼女の事が明音は心配になっていた。

「何で？思っていたより、好い人だったよ」

「好い人が何で警察に捕まってるのよ！今日だって、助けてはもらったけど…あの二人を殴っている時の目を見た？ほっといたら殺しちゃいそうな目をしてたよ！あれは本物だよ、ホンモノ！」

明音の話を、玲奈は大げさと思っているように鼻で笑う。
これから共に生活する相手の事を思って話をしている明音にとって、そんな玲奈の態度が、益々彼女の腹を立てた。

「玲奈、ちゃんと自覚してる？玲奈はアイドルなんだよ？これから頑張ればトップアイドルになる事だって夢じゃないんだよ、もっと自分の存在を考えて、自分に相応しい人間と行動をしてよ…」

自分の事を考えて言ってくれている明音の言葉と分かっていても、アイドルだからという理由で友人を選り好みする考えは、玲奈には理解しがたい。
そんな明音の言葉に挑発されるように、玲奈も明音に対して言い返した。

「そんな考えおかしいよ、だって私達、浩一君に何かされた？助けてもらったんだよ。なのに、まるで悪人と付き合うみたいな言い方して…それは違うと思う」

「だから！悪人だから警察に捕まってたんでしょ！玲奈は優しいの度がすぎて、お人好しすぎるんだよ！」

怒った明音は、一人玲奈の前を歩き家路に向かう。

アパートに着くと、明音は壁に貼っていた、二人の『禁止条例』を剥がし、三番目に記した（　）に記入をした。

・友情禁止

「何、これ？」
玲奈は書かれたその言葉を、全く理解できずにいる。

「これからの人間関係で、お互いが理解できる人以外の交流は禁止。ねぇ、玲奈…私達、東京に何をしに来たのか、ちゃんと自覚持とう。じゃないと、ここで変なスキャンダル出したら、折角掴んだ私達の人生が台無しだよ…」

涙ぐみながら訴える明音の姿を見て、玲奈は言葉が出なかった。
自分達の立場も、明音の言う事も分かっている。

ただ、『友情禁止』と書かれた言葉に込められた意味を、玲奈は一人の人間として理解したくないだけであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2486ba/

The others・butterfly～友情禁止条例～

2012年1月6日11時48分発行